

## 絵島・生島事件と御蔵島

新藤 恵久

一九九〇年六月と十月の二回にわたり御蔵島に滞在し、木床義歯に最もよく使われた同島のツゲと、ツゲをめぐる島の歴史について取材する機会に恵まれた。

### 御蔵島とツゲ

御蔵島の特産ツゲが何時ごろから本土に運ばれて、加工されるようになったかは詳らかでない。江戸時代に入ると天領となり、同島のツゲは島黄楊と呼ばれ、江戸に出荷されて櫛や印鑑、将棋の駒の高級品、そしてわが国独自の木床義歯の材料として使われた。

江戸時代、御蔵島のツゲは島民にとって唯一の収入源であった。島民はツゲを神の木と考え、氏子が神主に「此度黄楊木何拾本被下候」と願い出ると神主が神慮を願った上で伐らせる。この際、初穂金百疋を氏神に献じ、渡海安全を祈って米二俵程入れて「湯釜を立て」お祭りする。次に初穂を持って、神主が先頭になり根伐の場所、運搬の箇所を「男は何迄、女は何迄」と割り当てる。伐採されたツゲは、背負子につけられ険しい山道を「段々送り」に運びだされた。この重労働には島中の老若男女が総動員され、ツゲ材売却によって得られた食料は扶持米制度のもとで人頭割りに平等に配分さ

れた。

享保十年（一七二五）、廻船の保有が許され、同十三年、三宅島から独立した。この江戸との直接取り引きによる生活の安定は、人口の増加をもたらした。人口増は扶持米制度の維持を困難にするため、享和年間（一八〇一—〇三）、人口抑制のための二十八軒衆制度が成立した。この制度は養蚕による収入がツゲのそれを上回るようになった明治三十年代になつてようやく衰微した。

### 三宅島よりの分離独立運動

江戸期から明治期中頃まで、御蔵島島民の生活はツゲからの収入によって支えられてきた。江戸時代御蔵島は天領で、江戸初期より三宅島の属島として三宅島地役人（代官手代）の管轄下にあつた。そのため島外との交渉はすべて三宅島の廻船によつて行われた。当時御蔵島には三隻の漁船しかなく、海が荒れると何ヶ月も三宅島との連絡が途絶した。そこで「諸用向の伝達が不便な為」として御蔵島の神官印は三宅島で預かり、御蔵島の諸用を代行した。ところが次第にその範囲を広げられ、三宅島の役人が神官印を勝手に使つて私腹を肥やすなど不祥事が頻発するようになった。享和年間には無断で御蔵島唯一の財源であるツゲ山を借金の担保に入れるという事件までおこつた。（一、二）

長い間三宅島の横暴に苦しい生活を強いられてきた島民は三宅島から分離独立をめざして、神官加藤蔵人（のちに栗本姓）を中心に遂に立ち上がった。そして、島独自の廻船を保有して江戸へ直接ツゲを売り込み生活の安定をはかるべく請願運動を開始した。たまたま絵島事件に連座して御蔵島に流人として在島していた奥山交竹院は、これに深く同情し、昔の同僚である桂川邦教に島の実情を書き送り救済を懇願した。

## 絵島生島事件

御蔵島が貧困に喘いでいる頃、江戸大奥に風俗紊乱事件が起こった。幼少の將軍家継の生母月光院に任せ信任の厚かつた表年寄の絵島は、正徳三年（一七一四）正月十二日、寛永寺、増上寺へ代参した。その帰途、奥医師の奥山交竹院らは誘われて木挽町の山村長太夫座に立寄り、見物かたがた生島新五郎と密会したことが発覚した。これは公儀への願ひ事がある商人たちが、大奥に取り入る手段として絵島らを誘つたものとされ、大量の処罰が行われた。絵島の兄白井平右衛門は死罪、弟の豊島平八郎は重追放となった。絵島は同年二月二日親類預けとなり、さらに評定所で審査の結果、彼女が重職にありながら行状悪く今回の件は重罪であるが、死一等減じて永遠島と判決された。遠島は、死刑に次ぐ重罪で、江戸時代のそれは王朝時代の流刑に起源を持つものであったが、王朝時代に比べはるかに残酷なものであった。幕吏は流人を島に追い上げるだけで帰ってしまう。そのため手に職の無い老幼病人は餓死するか自殺するしか道はなかった。八丈島の記録にある島抜けをしたものは捕まると舌噛み切つて自殺となっているが、ほとんどは首を締められて殺されたという。絵島は月光院の請願により、信濃高遠に配流されることになり、高遠の厩座敷で二十七年過ごして寛保元年（一七四一）に六十一才の生涯を終えた。高遠での生活は、零下十五度にもなる冬に与えられたのは火桶一つ、「硯、紙所望候ば相渡可申候哉 無用に候」（内藤家家臣と幕府との問答・高遠町絵島厩屋敷）、また一步の外出も許されぬ厳しいものであった。

典医・奥山交竹院は御蔵島に永遠島、従兄弟の奥山喜内は死罪相当として水戸家預けとなった。木挽町の狂言座元は新島へ永遠島、同人抱歌舞伎役者で小柄ではあるが美貌で濡事にすぐれ名声を得ていた生島新五郎は、遊興の席を設けた榎屋善六とともに三宅島に永遠島となった。新五郎は後、赦免されて江戸で死んだ（七十四歳）とも配所で死んだ（三宅島の墓には六十一歳で没とある）ともいう。<sup>(三、四)</sup>

「秋元但馬守喬和が江島一件を裁断したのを聞いて、隠居していた柳沢吉保が秋元氏は綱吉家宣家継と三代に亘つて老中を勤めた、幕閣の故老でもあり思慮周密な人でもあるのに、何か考へ違へして斯うした事件を暴露させたか、必ず後悔して死ぬだらうと云った、処が果して其の年の八月に卒去されたといひ、大奥女中の役者買ひは、五代將軍の時には珍しからぬ事として、別段に問題にならなかつたとも云っている」(三田村玄龍『芝と上野浅草』・江島宮路)。

この事件では、肉筆美人画で著名だった懐月堂安度も梅屋と同町に住み彼の便宜をはかったとされて大島に遠島となるなど、連座したものは千五百人にのぼり、しかも日ごろ能率の悪さで定評のあった評定所が、わずか一月で判決を下した裏には、將軍家継の生母として強大な権勢を持つ月光院に対する他の大奥部屋のねたみを利用した政治的陰謀や御用商人の特権争いがからんでいとされるが真相は不明である。

### 奥山交竹院と御蔵島

大奥での特権を狙う商人たちは、將軍の代替わりのたびに行われてきた大奥御用の入替えや、あるいは割り込みといったものに目をつけていた。絵島はその力から一番狙われやすい地位にいた。奥山交竹院は、九百石取りの本道典医で謙徳院法印の子として大奥最高の地位にあった。

浅草の御用商人、梅屋善六は宝永元年(一七〇四)に猿ヶ股の堤防工事で儲けた土木請負業者で、日ごろ出入りしている小普請方の金井六右衛門の紹介で絵島と知った。そこで金井を通じて奥山交竹院に絵島を芝居に連れ出すよう頼んだ。生島新五郎の芝居のかかっている山村座の二階を借り切つての酒宴の席はもちろん善六持ち。ここに奥山と絵島があらわれた。時に絵島は三十才少し前、幕間にあらわれる新五郎は四十四才の男ざかり、すっかり気持ちをよくして杯を重ねていた絵島がようやく気がついて帰途についたときは、もはや薄暮となっていた。御錠口の門限ぎりぎりに通り抜けた一行

を待つ大奥の女中たちの神経はとぎすまされていた。

この大奥の女中たちの遊びについて三田村玄龍（鳶魚）は『芝と上野浅草』<sup>(七五)</sup>のなかで、

「江島等は自分の資金で放埒を働くのではない。如何はしい商人の取持ちで役者買ひするのだ。商人共は各々或る利益獲得を目的として、大奥女中の歛心を買はうとするのだ、我等は江島一件を大奥女中等の一己の放埒とは思はぬ」

と述べ、

「只だ奥女中が役者買ひをしたのなら正直な秋元閣老でも、渠れ程の事にはしまい全く一己の事柄なら処分は手安く何とでもなる。しかし一件者の中に水戸の家来奥山喜内が居る、彼は水戸で物頭を勤める者だといふから、中士以上の身分なのだ、其の喜内の従弟奥山交竹院<sup>いとと</sup>は水戸の御医師であったのを幕府に抱へられたのである。喜内の娘を江島の養女にして奥へ勤めさせても居る、是は布置結構された事柄で、一朝一夕の話ではない」

と記している。

さらに玄龍は『江戸生活のうらおもて』<sup>(七)</sup>のなかでは次のように書いている。

「上田秋成が『医になる始に欲心を絶て金口入、太鼓持、仲人、道具の取次はせまいといふて一生せなんだ事じゃ』と自分の誓言を書いて居りますが、これは当時の医者 of 弊風を穿った言葉だと思ひます。如何にも秋成に痛棒を加へられるだけのことはあつたらうと考へるのです。況してそれが女性をのみ相手に致します奥医者などになりますと、猶更かういふ風があつたと思ひます。この点に就て、善悪の例証も沢山ありますが、直に私の思ひつく例を挙げますと、あの江嶋事件の中に出て来る奥山交竹院——元来あの事件は奥女中が役者買をしたといふだけではありません。水戸家の或願望を含んで居ります。それよりも猶靚面にあつたのは、呉服後藤が銭座の計画やら、金銀ふき替に関する事柄や、奈良茂が或利権を獲得しようとしたことや、さういふ事が絡まって、江嶋を通じて幕府から権利を掠め取

らうとしたのであります。この江嶋につき纏はって居りまして、江嶋を中心に大奥にいろいろな関係を拵へて、利権亡者どもの為に最も動いたやつが、この医者の奥山交竹院であります」。

しかしながら御蔵島の流人となった交竹院は、島の解放運動のよき理解者であり協力者であった。そして島民の苦境を救い、島のツゲが乱伐により危機に瀕しているのを幕閣に認識させた功労者であった。桂川甫筑がいに義侠心があったにせよ、しかも寄合（免職中）の身であったことを考え合わせると、二人の信頼関係はなみのものではなかったと思われる。

遠島には期限がなかったが、恩赦があれば故郷に帰って昔ながらの生活を楽しむことができた。伊豆七島の流人たちも、日夕お赦の出ることを神かけて祈ったという。交竹院も江戸の空を眺めては帰郷の日を夢見ていたであろう。交竹院が流される数年前に三宅島に遠島となっていた英一蝶は、將軍代替の大赦で江戸に帰っている（一蝶は、江戸の方向である北向きの窓から蝶がたわむれるのを眺めていたところへ、赦免の報せがあり、この感銘が忘れられず、朝湖を改め一蝶にしたという。彼の三宅島で描いた絵馬が二つ、御蔵島の稻根神社の拜殿にある。狩林隱朝湖齋のサインがある。<sup>八九</sup>）。

交竹院は在島六年、廻船保有許可に先立つこと六年、この喜びの日を見ることなく享保四年（一七一九）八月二十一日、波乱の生涯を終えた。戒名は「運生院即誉乗往法印」、墓は本家筋の墓地に、墓石は島の人々のより一段と大きく、遺言によりはるか江戸を望む高台に立っている（墓石には奥山光竹院と彫られている）。

島民は彼の神社を作ってその功績を賛えたが、のちに桂川甫筑、栗本藏人と合祀された。三宝神社と呼ばれる石の小祠のなかの小さな青銅の神像は、中心上部に甫筑、向かって右側に交竹院、左側に藏人が座っている。背部には廻船保有の喜びの銘文が彫られている（後述）。



## 桂川邦教（甫筑）と御蔵島

邦教は江戸前期の蘭方医で、江戸時代の蘭学の宗家である桂川家の始祖である。幼名を小吉、のちに邦教とよむと称した。寛文十一年（一六七一）京都より平戸藩の侍医・嵐山甫安について外科学を学び、のち甫安について平戸に移り、長崎でオランダ医官について外科を修めた。貞享四年（一六八七）、京都に帰った邦教に、師・甫安は、邦教がオランダ語に習熟し、医学の才能がとくに勝れているところから「わが流儀を拡むるものは必ず汝ならん。桂川は京都嵐山の下を流れて流派大なるに至るべし。よって汝は以後桂川氏を用うべし」といひ、姓を桂川と改めさせた。また自分の名の一字を与えて甫筑（甫竹）とした。元禄九年（一六九六）甲府城主・徳川綱豊（五代將軍の兄・綱重の子。のちの將軍家宣）の侍医となり、宝永元年（一七〇四）、綱豊が將軍綱吉の世継になり西の丸に入ると幕府の医官となった。享保元年（一七一六）、吉宗が將軍職につくと一時寄合（休職）となった。享保九年（一七二四）、命を受けて吉宗の前でオランダ人と対談し、以後これが恒例となった。享保十一年、吉宗は甫筑の才能を賞賛し、再び奥医師となった。享保十八年春、オランダ人の江戸参府の時にも活躍し、翌十九年法眼に叙せられ、延享四年（一七四七）十一月、八十七才で死去（九一〇）した。

桂川家七代甫周の次女、今泉みね（一八五五〜一九三七）は、その回顧録『名ごりの夢』のなかで、同家の御蔵島に関する言ひ伝えを残している。（一一）

「なんでもずっと前の桂川の初代が御蔵島と江戸との交通の許されるよう將軍家にお願ひしたために流人島に初めてひらけて直接に徳川泰平めぐみの恩恵にあずかりうるようになったそれを徳として大明神に祀ったといひますが、そのお宮の境内にある木に生じた椎茸と、その木木の枝葉の茂りを手入れしてそれを薪にしたててお礼ごころで桂川に届けたいものでありますとか」。

「また一説には、桂川が吉利史丹の魔法を使って切り落とした首を繋いで治したといふことで島流しになりました。

その島がさてこそ御蔵島であつたさうですが、その後公方様が御病気で容易に御平癒なく、桂川を呼べとの御声がか  
りで呼びもどされまして、さいわひ公方様は御本復になられましたので何なりと望みをとの御仰せ、そこで流人島の  
みくら島にどうか江戸表との交通を年一回だけでもお許しありたいとお願ひ申しあげたとかいふ、こうした伝説が誰  
言ふとなく桂川の中でながく言い伝はつて来ましたが、吉野博士のおしらべによりますと桂川代々の中で、島に行つ  
たものはないさうでございます」。

「交竹院と初代桂川甫筑とは同僚でございますので、交竹院から島の実状を桂川へうったへて、ぜひ江戸へゆき  
きの叶ふように骨折られたいと折入つての頼みに甫筑の義侠心は燃えたち、御老中に熱心に許しを乞ふてようやくそ  
のことがとほり、島人の幸運が開けるやうになつたといふ理由で、交竹院と当時の神主であつた栗本藏人と桂川甫筑  
との三人が、三宝神社に現在でも祀られているといふことですが」。

吉野作造は、その著『露国帰還の漂流民幸太夫』のなかで御蔵島独立運動に触れており、また、御蔵島の人・栗本俊吉  
は『御蔵島概況』に次のように記している。

「元祿迄ハ人工百ニ充タズ、物産モ亦僅少ニシテ且ツ三宅島ノ配下ニ属シ、一歳數回同島ニ航行スルノミナリキ。  
然ルニ享保初年ニ至リ、物産ヲ内地ニ輸送販売センコトヲ企テテ、運送船ヲ所有センコトヲ時ノ代官ヘ請願シ、屢  
屢其許可ヲ乞ヒシモ、遮ラレテ事果サズ、島民甚ダ之ヲ遺憾トセリ、已ニシテ幕府ノ侍医奥山交竹院ナルモノアリ、  
大奥ノ老女江島ノ事ニ座シ諱セラレテ本島ニ来リ、其事情ヲ憐ミ、曾テ同僚タリシ桂川甫筑氏ニ書ヲ寄セ、本島ノ事  
情ヲ述ブ、同氏俠骨アリ、直接ニ幕府ノ老中ニ其事情ヲ述ベ、享保十年ニ至リ願意漸ク貫徹シ幕府ノ許可ヲ得手テ回  
漕船一艘ヲ購入シ、島内の物産ヲ内地ニ直送スルコトヲ得タリ。然レドモ三宅島ノ付属タルコトハ猶未ダ脱セザリシ  
ナリ」。

奥山交竹院の嘆願を受けた甫筑が、御蔵島解放のために奔走したのは、二人の間の強い信頼関係と、甫筑の交竹院への



深い同情心があげられる。そして甫筑の尽力が効を奏したのは、甫筑が失脚中、オランダ人との交渉で吉宗の高い評価を得て次第に復権してきた時であったこと、また絵島事件での過酷な判決の犠牲となった者に対する同情の声が周囲にあげられたことなどがその背景として考えられる。

また、三宅島島役人の不当な乱伐で、当時の御蔵島のツゲは半減、荒廃の危機に瀕しており、そのため同島を三宅島より分離して伊豆代官の直接支配にする必要があった。

こうして御蔵島島民の長年の悲願であった廻船建造の嘆願書に伊豆代官の許可が下りたのは、享保十年（一七二五）八月、利島より五人乗古船を購入したのは享保十三年（一七二八）春であった。

島民は甫筑を桂川前法眼大明神として神社に奉った。桂川家はこれを縁に家伝の葉を毎年送った。島からは返礼として毎年、椎茸、薪、魚、鳥などが送られた。

奥山交竹院、桂川甫筑、栗本蔵人の三人を祀った神社は、もとは祭神が別々にあつたが、のち島の大火のあと合祀され、石の小祠が作られた。三宝神社と呼ばれるこの小祠の中には三人の銅像の御神体が安置され、後ろには

巳の年の巳蔵の願ひ巳に叶ひ

巳よや巳船を巳なもよろこぶ

享保十年 巳九月吉日

の銘文が彫られている。三宝神社の祭礼は、毎年十一月十日、栗本蔵人の命日の日に現在も行われている。

『名ごりのゆめ』は、桂川家と島民の維新後も続いていた交流の様子を伝えている。

「御蔵島がいったいどのへんにあるのかも今だに知りませんが、なんでも鳥も通わぬ八丈島近くの離れ小島だそうで、その島の人が年にたしか一度江戸表へと出てきまして、島にはない物を買っては、島の物を売って帰りました。そこには、しゃぼんのやうな物さえなかつたらしく、それでも洗濯しゃぼん位を顔にぬってゐた人達かも知れませ

ん。又狐の憑いた人とか、おこりでふるへるやうな者に葵の御紋の書いたものでも見せますと、けろりと一度に直つて了う位、純朴な可愛い人達だったので。ところで桂川へは其都度必ず薪とか椎茸とか、時には他の産物を置いてまゐりました。こちらからはその代りにお膏薬を貰つて帰りましたが、その椎茸のやわらかで肉が厚くおいしいことと言つたら、今はもう到底味ははれない味です。そんなのが三尺四方もあらうかと思はれる大きなかぶせ蓋の箱——分厚な板で頑丈にこしらへた大箱は鉄砲道具でも出てくるかと思はれる見かけで、開けたらほんとに恐ろしい様なのに、ぎっしりと椎茸がつまつて後から方々へ分配するのに困つたほどですし、邸でも当時は椎茸ぜめの有様、薪も大束で何百束か、積み上げた所は三間四角ぐらいたつと思ひます。私など例によつて公然は見られないのですからソツと窺つてみた島人のその様子のめずらしさ。手織木綿かなんかの縞のきもので村役人ではないらしく、百姓か何かであつたようです。口つきから色の黒さから一見都離れした島の男がひょっくり江戸表にあらわれ出た時の光景、御酒でも出るといちいち舌鼓してもつたいねい、もつたいねいといつておしいたきます。

さて之は何時頃からのしきたりでございしたのか、何代も何代も前からずっと続いて維新後私共がまことにささやかな住居に移りましてからも、薪や椎茸を持ってきた其使は父を『殿さまあ』と呼んで地面に跪きました。島の方は正直だなあとあとと話してゐたことですが、『徳川のお直参がなんとまあお気の毒だあ』と申しては、先方は以前にかかはらず禮をつくしました。もう薪でも何でも置く所がないからもういいと言つて断りましたが断つても数回は参りました。併し實際置場所のないのを知つて成程と思つてかやつと其影を見せなくなりましたが、どんな所までも大きなおみやげを運んでたづねてくれたその真心は忘れられないと父も申しておりました。

この事實はどういふいわれであつたかしかと憶へませんが、島には桂川大明神といふお宮さへ建て居るかにきき傳へました。…中略…そのお宮の境内にある木に生じた椎茸と、その木木の枝葉の茂りを手入れしてそれを薪にしたつて御禮ごころで桂川に届けたものでありますとか」。

みねは、御蔵役人から薪三百把、梶粉二袋を送ったとの書状が現存していると述べている。

あとがき

わが国独自の木床義齒の材料に使われていたツゲについての取材を目的に、一九九〇年六月、御蔵島を訪れた。滞在中は、終始広瀬重雄氏のお世話になったが、氏のお話に出てくるツゲをめぐっての御蔵島の歴史はまことに興味深いものであり、驚きであった。その中で、明治期まで島の唯一の収入源であったツゲをめぐって一人の蘭方医——桂川甫筑——の姿が浮かんできた。そこで、現在も島民の尊敬を受けているこの蘭方医について調べてみた。

## 文 献

- (一) 柴田徳衛『御蔵島』一〇～一二頁、御蔵島役場、東京、一九五八（昭和三十三年）。
- (二) 駒沢大学文化科学研究部『生活を中心とする御蔵島実態調査報告』四七頁、駒沢大学、東京、一九六五（昭和四十年）。
- (三) 奈良本辰也『日本の歴史・十七』九七～一三七頁、中央公論社、東京、一九六六（昭和四十一年）。
- (四) 国史大辞典編集委員会『国史大辞典・二』二六三～二六四頁、吉川弘文館、東京、一九八三（昭和五十八年）。
- (五) 三田村玄龍『芝と上野浅草』一二六～一二九頁、春陽堂、東京、一九二五（大正十五年）。
- (六) 原色浮世絵大百科事典編集委員会『原色 浮世絵大百科事典・第二巻』三四頁、銀河社、一九八三（昭和五十八年）。
- (七) 三田村玄龍『江戸生活のうらおもて』五五〇～五五一頁、民友社、東京、一九三〇（昭和五年）。
- (八) 滝川政次郎『日本行刑史』一一二頁、青蛙房、東京、一九七二（昭和四十七年）。
- (九) 国史大辞典編集委員会『国史大辞典・三』四〇三頁、吉川弘文館、東京、一九八三（昭和五十八年）。
- (一〇) 日蘭学会『洋学史事典』雄松堂出版、一七九頁、東京、一九八四（昭和五十九年）。
- (一一) 今泉みね『名ごりの夢』五八～六二頁、平凡社、東京、一九六三（昭和三十八年）。
- (一二) 今泉源吉『蘭学の家 桂川の人々・第一編』三七～三九頁、篠崎書林、東京、一九六八（昭和四十三年）。

（東京都八王子市）

## “Ejima-Ikushima scandal” and Mikurajima Island

by Yoshihisa SHINDO

Mikurajima Island was under the control of the Miyakejima office from the sixteenth century. The natives of Mikurajima had been groaned under the tyranny of the officials of the Miyakejima.

Boxwood in Mikurajima has been known as a high quality material for wooden plate dentures, combs and seals from old days. Also this wood was an only financial source of the island.

This precious resources were on the verge of denudation due to reckless deforestation by the officials of the Miyakejima from the latter term of the seventeenth century, and the living of the natives was greatly distressed.

For this reason, the whole natives rose in revolt to aim the independece from the Miyakejima's control in the early stage of eighteenth century.

Kochikuin Okuyama who happened to be exiled to Miyakejima as a convict of the Ejima-Ikushima scandal, sent a letter lamenting their sad plight to his friend, Hochiku Katsuragawa who was living in Edo.

Thanks to Katsuragawa's earnest petition to the Edo central government, Mikurajima won it and became independent from the Miyakejima, and the boxwood forest has been preserved.